

大阪商業大学学術情報リポジトリ

平安時代の「酔象」駒発見から日本将棋の進化過程を推察するー将棋は仏教寺院で仏典を参考に改良が進められたー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2014-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古作, 登, KOSAKU, Noboru メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/17

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



平安時代の「酔象」駒発見から 日本将棋の進化過程を推測する

将棋は仏教寺院で仏典を参考に改良が進められた

古 作 登

はじめに

古代インド発祥と言われる将棋系ゲームの日本伝来については大きく分けて中国を経由したとされる「中国伝來說」と、南方の海洋交易路を介しての「東南アジア伝來說」の2つの説が存在し長い間議論されてきた。しかし最近では海外の将棋とは別に日本国内で現在の将棋につながる原型が考えられたという説も提唱されている。いずれの説が史実に近いかは今後の研究を待つとして、日本において将棋が改良され、現在一般的となっている9×9の盤面、40枚の駒、駒の再利用可といったルール以外に、さまざまな種類の将棋が創られたことはまぎれもない事実である。本稿では『二中歴』¹⁾に記されている平安時代に成立した通称「平安将棋」を基に、新たな駒が追加され盤面も拡大されていった将棋の進化過程において仏教の思想や仏典、中でも仏陀の生涯を描いた『ブッダ・チャリタ』²⁾の漢訳『仏所行讃』が強い影響を与えていたという筆者の仮説を紹介する。仏教は古墳時代に中国から伝わったとされ、奈良時代以降多くの寺院の建立を初めとする支配層の積極的な施策により国内に広まっていった。当時の日本の統治に大きな役割を果たした仏教は、僧侶だけでなく貴族から庶民に至るまで人々の思想に少なからぬ影響を与えていた。日本において将棋が指されるようになったのは諸々の史料を基に推測すると平安時代10世紀後半～11世紀前半と思われる。古代インド発祥の盤上遊戯シャトランガや中東から西洋に広まったシャトランジ、チェス系の立像形の駒と違い、駒の種類を表すのに漢字を用いたのは主に識字層を対象としたためで、これまで発見された最古の駒も知識階級が集まっていた奈良時代から平安時代の中心的仏教寺院興福寺であり、中世の将棋駒関連史料が残されているのも神社や仏閣が多い。仏教を中心とす

る日本人の宗教観と将棋はこの遊戯の最初期から密接な関係があったのである。

1．発見された酔象駒の特徴

2013年10月24日橿原考古学研究所の発表を受けて大手新聞各紙で旧興福寺敷地内から平安時代のもと思われる「酔象」駒（写真1）が発掘されたことが報じられた。この「酔象」は1098年頃のものとは推定されているが、現存する最古の駒とされる1058年の「興福寺駒」と同時に見つかった木簡にも「酔像」（象を像と表記）の文字が書かれていたため、以前から「酔象」の駒が作られた可能性は示されていた。しかし今回実際に駒の形になった酔象が見つかったことにより、鎌倉時代以降に流行したと考えられていた中将棋やそのほかの大型将棋における「酔象」が、平安時代に創案されていたこと、また大将棋、中将棋など「酔象」の駒が配置されている、鎌倉時代に成立したとされる各種大型将棋の原型が平安時代に考えられたという可能性は極めて高くなったといえる。



（写真1）2013年旧興福寺敷地内で発見された酔象駒（奈良県立橿原考古学研究所提供）

10月25日の毎日新聞朝刊の記事の概要は以下の通り。

奈良市登大路町の興福寺旧境内から、平安時代の将棋の駒「酔象」が見つかった。奈良県立橿原考古学研究所（橿考研）が24日、発表した。一緒に出土した木簡に「承德二年」（1098年）とあり、1976年に京都市の集落跡（14世紀）から出土した例を約250年さかのぼり、国内最古となる。（中略）「酔象」は現代の将棋の駒に近い五角形だった。木製で一部破損しているが、縦25ミリ、横15ミリ、厚さ2ミリ、裏面に墨の跡はなかった。（中略）1993年に今回の出土地点の西約200メートルの旧境内で、「天喜六年」（1058年）と記された木簡や、「玉将」「金将」などの駒15点、「酔像」と練習書きをした木簡が出土。鎌倉時代に出現したとされる酔象が、平安時代にはあった可能性が指摘されていた。

2．酔象駒が作られた理由と由来に関する推論

古墳時代に日本に伝えられた仏教は飛鳥時代～奈良時代～平安時代と時代が進むにつれ国が公式に認める宗教として安定した地位を確保し、その間大陸から海路を通じて日本に多くの仏典がもたらされた。こうした仏典の中でも仏陀の生涯を著した記述として有名な『ブッダ・チャリタ』は原文がサンスクリット語で記述され、中国においては『仏所行讃』という名の題名に漢訳され広まった。研究者によればサンスクリット語版はインドの叙事詩『マハーバーラタ』に比肩する名文という。しかし全28巻のうち、サンスクリット語で現在に伝わっている経典は前半の14巻だけで、残りの14巻は漢訳の形でしか残っておらず、サンスクリット語版で記された後半部分は散逸してしまったものと考えられている。中国から多くの経典が漢文として日本にもたらされたのと同様、この『ブッダ・チャリタ』も漢訳の『仏所行讃』として日本に伝えられた可能性が高い。この中にある「酔象調伏」の物語は後半部分の「酔象調伏品第二十一」におけるエピソードで、概要は次のとおりである。

弟子を従え布教の旅を続けている仏陀に嫉妬心を懷き危害を加えようと弟子の一人である提婆達（デーバダッタ）が酔った象（狂った象、あるいは酒に酔った象）を街に放ち、大暴れさせた結果多くの人々が犠牲になったが、その酔象は仏陀の前に来ると酔い

から醒めて暴れることをやめ、仏陀の足下に伏し教えに従ったという話である。このエピソードは師に従うべき弟子の裏切りや、無法に対する仏陀の堂々とした対応、また暴力の象徴である酔象を改心させるなど多くの描写がドラマチックで後世にも形を変え伝えられた。この「酔象調伏」の逸話は仏陀の生涯を描いた『仏所行讃』の中でも印象深く人気が高いもので、仏教遺跡の壁画などにも描かれている。

『日本書紀』や『隋書・倭国伝』に記録が残っているとおり、古くから日本で知識階級のたしなみとして親しまれていた盤双六や囲碁といった盤上遊戯と同じように、仏教寺院で遊ばれていた将棋というゲームをより面白くするために、学僧らがこうした仏典に登場する個性的なキャラクターや象徴的な言葉を基にし、新たな駒を加えて行く工夫、改良がなされたものと筆者は推測している。近年の研究において初期の平安将棋（ 9×9 、36枚制）は現代の将棋（ 9×9 、40枚制）と同じ大きさの盤面を持っていたが、取った駒の再利用ができず、強力な働きを持つ飛車と角行がないため引き分けが多かったと推測されている。本来勝負をつけるための遊戯なのに引き分けが多すぎるのは面白さを損ない敬遠される。そこで知識階級である僧侶らが新しい駒、とくに強力な駒を平安将棋に追加していったと考えることができる。今回発掘で見つかった酔象の駒は玉に匹敵する周囲7マスに移動可能で他の駒と比べるとやや強い働きを持つ。続いて酔象に関連する『仏書行讃』の文と、駒の働き、名称と駒の性能の関連性について筆者の見解を述べる。なお本稿における漢文を基にした日本語の大意は諸々の資料を参考にした筆者の仮訳であり、漢籍や仏典の専門家によるものではないことをご了承いただきたい。また駒と関連する各種将棋は安土桃山時代以前の史料に記載されている通称「六将棋」³⁾を主に対象とした。

◎「酔象」（すいぞう）

（用例）

天龍衆嘗從 漸至狂象所
諸比丘逃避 唯與阿難俱
猶法種種相 一自性不移
酔象奮狂怒 見佛心即醒
投身禮佛足 猶若太山崩

平安時代の「酔象」駒発見から日本将棋の進化過程を推測する

（『仏所行讃』「守財酔象調伏品第二十一」より抜粋）

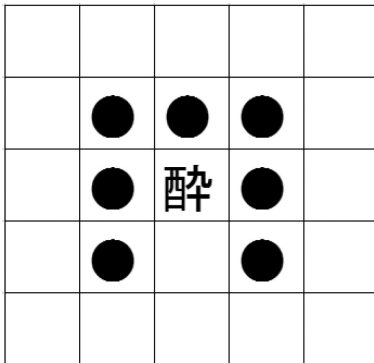
（大意）

天人や龍王は仏陀を守り従っていたけれども仏陀が（デーバダッタが放った）狂った象のところに至ると、比丘たちはみな逃げてしまい、阿難⁴ただ一人だけが仏に伴った。

法（物事）には種類の相があるが、それらの相を離れても本性（本質）は移らないものだ。

酔象は興奮し怒り狂っていたのに、仏を見るとすぐさま心が醒め、身を投げ出して仏の足に礼をした。あたかも大きな山が崩れるかのように。

関連する将棋＝中将棋、大将棋 摩訶大々将棋、泰将棋ほか（通称「朝倉将棋」など）
駒の性能と由来



（図1）

酔象＝酔と表記 ●印の場所に動くことが可能（以下同じ）

引用した文のように、酔象は強大な力をふるって悪、暴力を働きながらも仏陀の前に出ると、たちまち自らの行いの過ちに気づき改心して礼をし、仏陀の教えに従った生き物として描かれている。象は人間に比べ大きく圧倒的な力を持つ存在として仏陀の生涯を描いた物語の随所に出てきており、本話の中でも象徴的で重要な役割を果たしている。こうしたことから「酔象」は中将棋や大将棋といった大型将棋においても最も大切な「玉」の近くに配置されたと推測できる。今回興福寺で発見された酔象は裏に何も書かれていなかったことから遊戯の改良過程のものと考えられる。後年の中将棋以降の酔

象は成ることで「太子」に昇格したが、導入当初はそうした働きはまだ与えられていなかったのだろう。

またこれまで発掘されて来た古代の駒としては『二中歴』に記述された平安将棋の駒を除くと酔象以外の駒はほとんど見つかっていない⁵⁾。大型将棋の駒の種類の多さから考えても、もし早い時期に酔象以外の駒が創られていたとしたらそれらの駒が発掘されている可能性は少なくない。このことから酔象は将棋の改良過程の最初期に取り入れた駒であって、木村義徳、清水康二らの著書、論文に見られる平安将棋に酔象を追加しただけ（図2）の将棋や、また大駒である飛角が加えられた現行の将棋に酔象が存在する、通称「朝倉将棋」（図3）が主流にはならなくとも平安時代から鎌倉時代にすでに考えられ試されていた可能性は高いと推測できる。

香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香
				酔				
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
				酔				
香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香

（図2）

平安将棋に「酔象」を加えただけの改良過程最初期の将棋（推定）

平安時代の「酔象」駒発見から日本将棋の進化過程を推測する

香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香
	飛			酔			飛	
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
	角			酔			飛	
香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香

(図3)

現行将棋に酔象が加わった通称「朝倉将棋」

遊戯の改良過程においてはさまざまな試みがなされ、優れたものは後世に残るが消えていくものも少なくない。図2や図3のような平安将棋の発展形が『二中歴』や『象戯図』に記載されなかったのは、ゲームとして試され一部で遊ばれはしたが、室町時代に流行した「中将棋」(大型将棋の代表)や現行の将棋(小型将棋の代表)などと比べると遊戯性において優る部分が少なく、主流にならなかったからではないだろうか。

3. 酔象以外の大型将棋の駒と仏典、仏教哲学の関連性

今回酔象駒の由来を調べるために『仏所行讃』を通読したことで次々と新たな発見をすることができた。大型将棋の駒、特に重要な働きを持つ駒の名称や働きがこの仏典に登場する人物や生き物、国、概念、仏教哲学を反映している可能性が極めて高いのである。そうした駒と基になったと思われる漢文に関する解釈を順に紹介していく。

◎「師子」「獅子」(しし)*現代における中将棋駒ではほとんどが「獅子」と表記されるが、中将棋が流行した中世では仏典同様「師子」と書かれた駒(写真2)も見ついている。仏典においては仏陀を表す意味で使われることも多く、それゆえ「けものへん」を取った(仏陀に失礼のないよう)と考えられる。



(写真2) 水無瀬神宮所蔵の中将棋駒(水無瀬兼成筆)安土桃山時代 右端中段に「師子」の駒

(用例)

縦見而不耀 如觀空中月
 自身光照耀 如日奪燈明
 菩薩眞金身 普照亦如是
 正眞心不亂 安庠行七步
 足下安平趾 炳徹猶七星
 獸王師子步 觀察於四方
 (「生品第一」より抜粋)

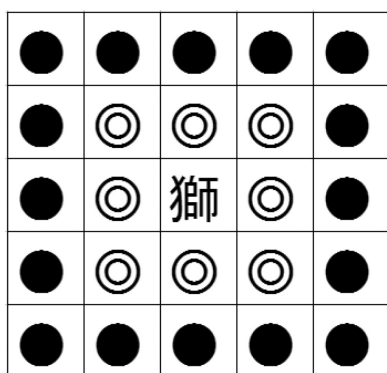
(大意)

(仏陀を)ほしいままに見ても輝かないことは、あたかも空中の月を観るようである。
 自らの身が光り輝いて照らすなら、太陽のように燈の明かりを奪ってしまう。
 菩薩の黄金の身体は、あまねく世を照らすものである。
 真っすぐで正しい心は乱れず、安らかに七歩あゆめば、
 足下の平らな跡は、北斗七星のように明るく輝いた。

(仏陀は) 獣の王である師子のような歩みで四方を観察した。

関連する将棋 = 中将棋、大将棋、大々将棋、摩訶大々将棋、泰将棋

駒の性能と由来



(図4)

獅子=獅 ●の場所に駒を飛び越えて移動可能。玉の動きを2回(◎に移動した場所からもう1回)することが可能。よって◎の場所に移動し元の場所に戻ってくることも可能。◎の場所の相手駒は動かずに取りることができ(居食い) ◎の場所と●の場所2カ所の駒を同時に取ることが可能。*中将棋の場合。以降の各種駒の動きも将棋の種類によって異なる場合があり、文献によって異説が存在するものもあるが、本稿では代表的と思われる動きを表記した。

生まれたばかりの仏陀のことを他の光を奪わずに輝く存在とたたえた文で、足跡すらも輝くと表現し、歩くさまを「百獣の王」とされる獅子に例えている。駒としての師子(獅子)も周囲24マスすべてに利きを持ち、駒を飛び越えることもできる接近戦においては最強の駒である。平安大将棋を除く大型将棋すべてに存在することから、「酔象」同様比較的早い段階で追加された駒と考えられる。ただし「居食い」など駒の特殊な動きに関しては「酔象」の成りが後から追加されたと考えられるのと同様に「師子」が考案された当初から備わっていたかどうかは不明である。私見では後から徐々に能力が付け加えられたと考える。

師子(獅子)は前に取り上げた「酔象調伏」にまつわる話に登場することもある。『仏所行讃』に記されたように酔象が仏陀の慈悲心によっておとなしくなったのではなく、後世の説話において仏陀の右手から獅子が飛び出して、それにより酔象が静まったとするものもあり、2世紀以降の史料にこうした話を見ることができる。この獅子は仏陀の分身を意味するという解釈も存在する。従って日本で酔象の駒が導入された時点で

はすでにその力を越える師子（獅子）の駒に関するイメージ、新しい将棋の中に取り入られる条件が整っていたことは確かであろう。

◎「龍王」（りゅうおう）

（用例）

諸龍王觀喜 渴仰殊勝法
 曾奉過去佛 今得值菩薩
 散曼陀羅花 專心樂供養
 （「生品第一」より抜粋）

（大意）

諸々の龍王は歡喜し、殊勝なる法をのどの渴いた人が水を求めるよう仰ぎ見た。
 かつて過去の仏を奉ったことがあったが、今また菩薩たる存在を得た。
 曼陀羅の花を散らし、もっぱら心は供養を楽しむ。

関連する将棋＝（現在の）将棋、中将棋、大將棋、大々將棋、摩訶大々將棋、泰將棋
 駒の性能と由来

		↑		
	●	↑	●	
←	←	龍	→	→
	●	↓	●	
		↓		

（図5）

龍王＝龍 タテヨコにどこまでも進むことができる。ナナメ前後に1マス動くことができる。
 駒を飛び越えることはできない。

「龍」も「王」も仏典の中ではしばしば登場する名称。この文での「龍王」は高貴な

平安時代の「酔象」駒発見から日本将棋の進化過程を推測する

人たちを表したものであろう。圧倒的な力を持つ伝説の生き物である龍と人間社会の王を組み合わせた「龍王」なので駒の働きもかなり強力なものになっている。ほとんどの大型将棋に採用されたのは、名称も親しみやすく性能もゲームバランスを損なわない適度な強さだからであろう。現行の将棋にも「飛車」の成り駒として残っている。

◎「太子」(たいし)

(用例)

汝當聽我說 今者來因縁
我從日道來 聞空中天説
言王生太子 當成正覺道
并見先瑞相 今故來到此
欲觀釋迦王 建立正法幢
(「生品第一」より抜粋)

(大意)

(釈迦の父である王に向かって)私の話を聞きなさい。今ここに來た因縁を説きましよう。

私は日に従って道を來たが、空中から天の声が聞こえた。

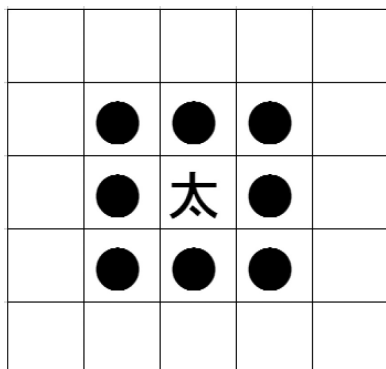
その言葉は「王に太子が生まれた、必ず正覺の道を成すであろう」だった。

並びに先に瑞相(良い予兆)を見たので、今ここに來たのである。

釈迦王が正法の幢を建立するのを見たいものだ。

関連する将棋＝ 中将棋、大将棋、泰将棋

駒の性能と由来



(図6)

太子＝太 周囲8マスに動ける。玉将と同じ価値を持ち、太子があれば最も大切な駒である玉将を取られても負けにならずそのまま指し継ぐことができる(玉将の代わりになる)。

釈迦族の王である仏陀の父に仙人がなぜここに訪れたかを説く一節。仏陀のことを王の跡継ぎである太子と呼んでいる。大型将棋における「太子」も言葉通りの後継者の意味を持たせ、玉がなくなっても太子が存在すればその国は滅びない(将棋は負けでない)というルールが定められたのであろう。

◎「提婆」(だいば)

(用例)

爾時提婆達 見佛徳殊勝

内心懷嫉妬 退失諸禪定

造諸惡方便 破壊正法僧

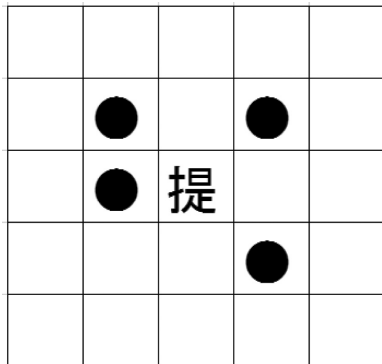
(「守財醉象調伏品第二十一」より抜粋)

(大意)

その時提婆達⁶⁾(デーバダッタ)は仏の殊勝な徳を見て、心の内に嫉妬を懷き、諸々の禪定を失ってしまった。
諸々の悪を方便として造り、正法の僧を破壊した。

関連する将棋＝ 摩訶大々将棋、泰将棋

駒の性能と由来



(図7)

提婆＝提と表記 「諸象戯図式」にある動き方で解説書により動きの解釈が異なるが前後ナナメ1つ、左横、右ナナメ下といびつな動きで、動きも弱い方に属する。

仏陀の弟子でありながらその徳を目のあたりにして嫉妬心を懷いたダイバダッタは典型的な悪人として描かれるが仏陀の血縁（従兄弟とする説が多い）といわれている。仏陀に対する悪行の報いとして後に地獄の最下層である無間地獄に落ちたとされている。しかし仏典の中には地獄に落ちたダイバダッタが輪廻を経て未来の世に再び生まれてくる時は如来になると書かれているものも存在する。物語の内容に沿った形で現世（成る前）は駒の動きも左右非対称でバランスが悪く、強い駒とはいえない。しかし摩訶大々将棋においては「提婆」が成る（成就する）と「教王」という極めて強力な駒に進化することもこうした仏典の内容を反映した可能性が高い。

◎「自在王」(じざいおう)

(用例)

群生皆染著 而有無著容

世間心動揺 而獨靜諸根

光顔如満月 似味甘露津

容貌大人相 慧力自在王

所作必已辦 為宗稟何師

(転法輪品第十五より抜粋)

(大意)

多くの人々は皆、欲望と物の世界に染まるが、
あなたはそうでないように見える。
世間の人は皆、心が動揺しているが
あなた一人だけは諸根が静かである。
光り輝く顔は満月、甘露水のような。
容貌には大人の僧があり、その智慧の力は自在王のようである。
すでに修業をすませ悟りを開かれたような所作だが、
どのような師について学ばれたのだろうか。

関連する将棋＝摩訶大々将棋、泰将棋

駒の性能と由来

∞	∞	∞	∞	∞
∞	∞	∞	∞	∞
∞	∞	自	∞	∞
∞	∞	∞	∞	∞
∞	∞	∞	∞	∞

(図8)

自在王＝自 玉将と同じ価値を持ち(取られると太子など玉の代わりになる駒がない限り負け)盤上のどの場所にも移動可能。どこにでも行けるという意味の∞で表記した。相手の他の駒の利いていない駒を取ることができる。*いくつかの将棋関連の文献には「自在天王」でなく「自在王」と記述されているので同じ意味を持つと解釈した。

文字通り自在にどこにでも行けるという駒。大型将棋の中でも後期に作られたと思われる摩訶大々将棋(王将の成り駒)と泰将棋に存在する。玉将の役目を果たしながら強力な攻め駒として創られたのだろう。泰将棋に玉将が存在しない理由ははっきりしないが、玉より王を重んじる(最初期の駒は玉将のみで王将はなかった)ようになった考えの始まりかもしれない。

◎「摩竭」(まかつ)＊現代に伝わる資料では竭の偏は魚偏になっている

(用例)

世尊大眷属 進詣王舎城

憶念摩竭王 先所修要誓

世尊既至已 止住於杖林

瓶沙王聞之 與大眷属俱

舉國士女從 往詣世尊所

(「瓶沙王諸弟子品第十六」より抜粋)

(大意)

世尊(仏陀)は大勢の弟子たちとともに進み、王舎城に詣でた。

摩竭(マガダ国・摩竭陀国)の王(瓶沙)との先に修せしところの誓いを憶えていたからである。

世尊はその国に至ると杖林に住まいを定めた。

瓶沙王はこれを聞いて大勢の御供とともに、

さらには国士、女性も従えて世尊のところに往き、詣でた。

関連する将棋＝ 摩訶大々将棋、泰将棋

×		×		×
	×		×	
×		摩		×
	×		×	
×		×		×

(図9)

摩竭＝摩 前後ナナメにどこまでも進むことができる。途中で1回、方向を変えることが可

能、現代将棋の「角行」の動きを2回することができる。駒を飛び越えることはできない。＊現代に伝わる将棋の史料では「竭」の字の偏をを魚偏に置き換えた文字が駒の配置図に示されているが、摩竭魚（マカラ＝インド神話中の魚）に影響されたか、サンスクリット語の「マガダ」を音写したと考えられる。マガダが「摩喝陀」「摩揭陀」「摩訶陀」「摩迦陀」などと各種文献でさまざまな表記がなされるのと同様に駒の名称においても同じ意味を持つと解釈した。

駒の性能と由来

摩竭陀国は古代インドのガンジス川中流域に存在した王国の一つ。仏典に多く登場する国名で、仏教発祥の地とされ釈迦に関連するエピソードが多く描かれるなど重要視されている。マガダの王統は後の王朝に継承され、この地域がインド統一国家の政治、文化の中心地となった。よって「摩竭」という駒の名もこの国名の一部を借りたものと考えられる。仏典の説話の中でも重要な意味を持つ国家に例えたのだろうか、駒の性能も非常に強力なものになっている。

◎「無明」（むみょう）

（用例）

観法無我所 生滅不堅固

不堅軟中上 我慢心自忘

熾然智慧燈 離諸癡冥闇

見盡無盡法 無明悉無餘

（「大弟子出家品第十七」より抜粋）

（大意）

法（事物）を観るに我所はない、生滅も堅固ではない。

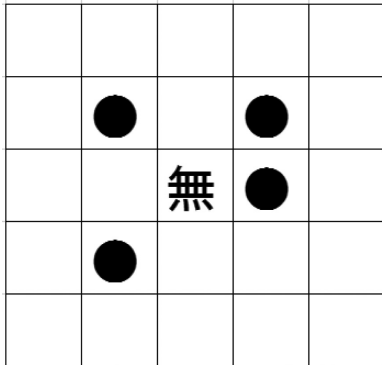
堅軟も中上もなくなったので、慢心は自ずと忘れられた。

盛んに智慧の燈が燃え、諸々の癡（おろか）な闇は消えた。

盡と無盡の法を見て、無明も悉く無くなった。

関連する将棋＝摩訶大々将棋、泰将棋

駒の性能と由来



(図10)

無明＝無

前後ナナメ1つ、右横、左ナナメ下といびつな動きをする。史料によって動きの解釈が異なる。

無明とは仏教の世界では迷いや真理を知らないことを意味する。この無明を克服することで悟りに近づくことができる、仏教においては極めて重要な概念であることから駒の名前に使われたと考えられる。動きは弱く、この駒と左右対称の動きをするのが「提婆」である。しかし成る（成就する）ことで「法性」という最強レベルの駒に飛躍的に昇格するところも「提婆」（成ると「教王」）と同じ。これもまた仏教の世界観を駒に投影したものといえるだろう。用例の文は、智慧の明り（真理を知り悟りに近づくこと）によって負の概念である無明から離れることができることを表した一節である。

◎「毒蛇」（どくじゃ）

（用例）

涅槃為最安 禪寂樂中勝

人王五欲樂 危險多恐怖

猶毒蛇同居 何有須臾歡

（「父子相見品第十九」より抜粋）

(大意)

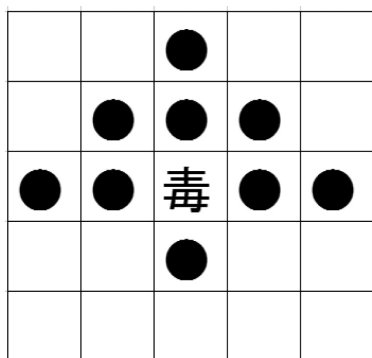
涅槃こそは最も安らかであり、禅定は寂楽の中でも勝る。

人王の五欲の楽しみは、危険で多くの恐怖をとまなう。

あたかも毒蛇と同居するようなもので、何でわずかの間でも歡ぶことができるだろうか。

関連する将棋＝大々将棋、泰将棋

駒の性能と由来



(図11)

毒蛇＝毒 前方と左右に2マス、ナナメ前と後ろに1マスずつ動ける。

毒蛇はこの『仏所行讃』の文中にたびたび登場する生き物で、危険なもの(考え)の象徴として描かれる。それだけに将棋の駒としてはそこそこに強いが、克服することの可能な存在として創作されたことが推察できる。毒蛇を食べる習性を持つという後述の「孔雀」と性能を比較すれば明らかである。

◎「羅刹」(らせつ)

(用例)

至毘舍離城 化諸羅刹鬼

并離車師子 及諸離車衆

薩遮尼犍子 悉令入正法

平安時代の「酔象」駒発見から日本将棋の進化過程を推測する

(「守財酔象調伏品第二十一」より抜粋)

(大意)

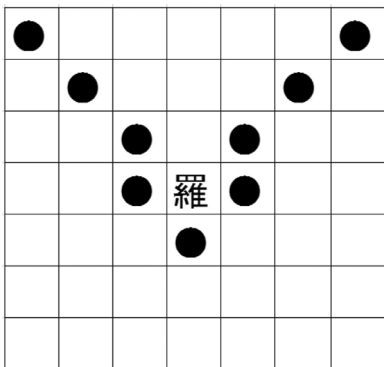
毘舍離城では(仏は)諸々の羅刹や鬼を教化した。

ならびに離車の師子および諸々の離車の人々、

薩遮、尼犍子らもことごとく正法に入らせた。

関連する将棋＝摩訶大々将棋、泰将棋

駒の性能と由来



(図12)

羅刹＝羅 ナナメ前に3マス 左右と後ろに1マスずつ動ける。駒を飛び越えることができない。史料により動きの解釈が異なる。

文中では鬼と同じように強く、仏法を知らない乱暴な存在として描かれているが、仏陀により教化される。羅刹は仏典においては羅刹天として破壊を司る神とされるが、最終的には仏に仕え、仏法を保護する役目となる。こうした背景を反映し、克服可能な中くらいに強い駒として設定されたのではないだろうか。

◎「大龍」(だいいりゅう)

(用例)

跪伏佛足下 而為説法言

象莫害大龍 象與龍戰難

象欲害大龍 終不生善處

貪恚癡迷醉 難降佛已降

（「守財醉象調伏品第二十一」より抜粋）

（大意）

仏の足元に跪き伏せている（象の）為に（仏は）法を説いて言った。

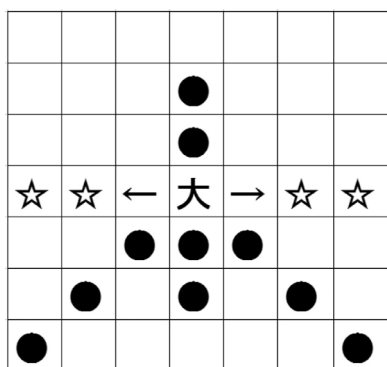
「象よ、大龍を害すことなかれ。象と龍との戦いはただ苦難でしかない。

象が大龍を害そうと欲すれば、終に善い処に生まれ変わることはできない」

貪りと怒りと愚かさに迷い酔うこと、仏はこの降し難きものをすでに降した。

関連する将棋＝大々将棋、泰将棋

駒の性能と由来



（図13）

大龍＝大 ●の箇所に移動可能。左右は→の方向にどこまでも移動可能。このうち左右2マスと3マス目（☆の場所）に動く時だけは駒を飛び越えることができる。史料により動きの解釈が異なる。

他の「龍」の文字を名称に持つ駒と同様に強力な動きを持つ。「酔象」の動きと比較すれば象と竜が戦っても象に勝ち目はなく、無益な戦いであることは明らかである。象との違いを明らかにするために強い駒として創られたのだろう。

◎「飛龍」(ひりゅう)

(用例)

飛龍乗黒雲 垂五首涙流

四天及眷属 含悲興供養

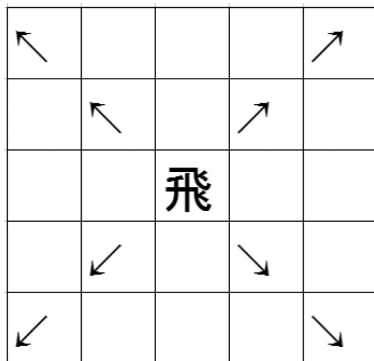
(「大般涅槃品第二十六」より抜粋)

(大意)

(仏が涅槃に入ったことで)飛龍は黒雲に乗って五つの首を垂れて涙を流し、
四天王と眷属は悲しみを含んで供養している。

関連する将棋＝平安大将棋、大将棋、大々将棋、摩訶大々将棋 泰将棋

駒の性能と由来



(図14)

飛龍＝飛 前後ナナメの方向にどこまでも進むことができる(現代将棋の角と同じ)。駒を飛び越えて進むことはできない。＊解説は平安大将棋の場合の動き。大将棋など他の大型将棋における飛龍の動きは、他に強力な駒が導入されたこととともなって弱くなっている。

「飛龍」は大型将棋としては最も早い時代に成立したと思われる「平安大将棋」において存在する駒で、強力な働きを持つ。「飛龍」は仏陀の入滅という物語のクライマックスに登場する架空の生き物だけに、それまでの平安将棋の他の駒にない、全局を制するほどの大きな力を持たせたのであろう。

◎「孔雀」(くじゃく)

(用例)

王於閻浮提 心常無所憂

深信於正法 故號無憂王

孔雀之苗裔 稟正性而正

普濟於天下 兼起諸塔廟

(「分舍利品第二十八」より抜粋)

(大意)

王は閻浮提においては心を常に憂う所なく

深く正法を信じ、それゆえ「無憂王」と呼ばれていた。

孔雀の血筋を引く、正義を行う性である。

天下をあまねく済度し(救い) 兼ねて多くの塔廟を建てた。

関連する将棋=泰将棋

駒の性能と由来

×		×		×
	×		×	
		孔		
	●		●	
●				●

(図15)

孔雀=孔 ナナメ前に現代将棋の「角行」の動きで何マスも進め、途中で90度向きを変えることができる。ナナメ後ろには2マスまで進める。駒を飛び越えることはできない。

孔雀も他のいくつかの駒の名称同様に物語の冒頭から最後までたびたび登場する生き物である。現代では雄が美しい羽根を持つ鳥として知られているが、仏典における「孔雀」は同じ鳥でも悪や危険の象徴である「毒蛇」を食べてしまう強い存在、神格化された鳥として描かれ、密教とのつながりが強い。密教においては孔雀⁷⁾が凡夫の持つ煩惱（毒蛇に例えられる）を消滅させるともいわれている。将棋の駒としては毒蛇より強いことを表すかのように、ナナメ前には何マスでも進め、さらに進む途中で直角に方向を変えることもできるという強力な駒として創られたのであろう。

◎「力士」（りきし）

（用例）

人民出城者 悉皆驚怖還

告諸力士衆 諸國軍馬來

象馬車歩衆 圍遶鳩夷城

城外諸園林 泉池花果樹

軍衆悉踐蹈 榮觀悉摧碎

（「分舍利品第二十八」より抜粋）

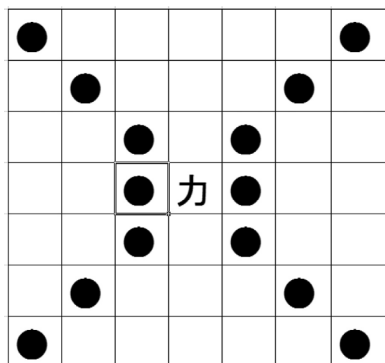
（大意）

城を出た人々は、皆ことごとく驚き怖れて城に還り、力士たちに告げた

「多くの国の軍勢が来ている。象、馬、車、歩兵が鳩夷城の周りを取り囲み、城外では畑や林、泉も池も花も果樹園も、皆軍衆にことごとく踏みにじられ、かつての栄やかな景観は碎かれてしまった」

関連する将棋＝摩訶大々将棋、泰将棋

駒の性能と由来



(図16)

力士＝力 ナナメ前後に3マスずつ、左右に1マス動ける。駒を飛び越えることはできない。史料により動きの解釈が異なる。

力士は物語の序盤から最後までたびたび登場する一般的な人物の総称で支配層、恐らくは武官の位と思われる。駒の動きも近距離の戦いに強いが、利きが最大3マス先までなので盤が大きくなるとそれほど強いとはいえず中堅クラスの駒といえるだろう。上に挙げた文例では同時に「象」、「馬」、「車」、「歩」といった将棋駒の名称に関連する単語が多く出てきていることにも注目したい。

4. 総 論

これまで見てきたように、現代に伝わっている多くの大型将棋の駒と仏典、仏教哲学が密接な関係にあることは明らかといえる。最古期の駒の発見場所の多くが仏教寺院という事実を含め、日本将棋の発展においてこれだけ仏典の影響があるとすれば、その伝来に関しても深い関連があると見るのが自然ではないだろうか。古墳時代の6世紀頃に中国大陆から仏教が日本に伝えられ、その後もたびたび仏典がもたらされたことは歴史的に明らかであるように、日本将棋の成立にも古代中国の宗教、文化が大きな関与をしていると筆者は考える。今回駒が見つかった興福寺は中国・唐代に起こったとされる法相宗⁸⁾の日本における本山ということもそれを裏付けている。仏典の数は膨大なので今

回紹介しきれなかった駒においても影響を与えたと思われる仏典、由来を今後解明して行くことで、日本将棋と仏教の親密な関係がより深く解明できるだろう。

【注】

- 1) 『二中歴』は現時点では将棋のルールに関する記述がある最古の文献と考えられている
- 2) 大乘仏教の僧侶である馬鳴（アシュバゴーシャ）が著したとされるサンスクリット語の叙事詩。中国に伝わり漢訳された
- 3) 将棋（小将棋） 中将棋、大将棋、大々将棋、摩訶大々将棋、泰将棋を総称して「六将棋」と呼ぶ
- 4) 仏陀の従兄弟で十大弟子の一人、「多聞第一」と称された。ブッダには侍者として25年仕えたという。
- 5) 中世、室町時代以降と推測されている福井の朝倉遺跡から発掘された通称「朝倉駒」も現行将棋以外の駒で見つかっているのは酔象のみである
- 6) 本文の表記以外にも提婆、提婆達多、調達、調婆達などいくつかの漢字に音写されている
- 7) 人々の厄災を取り除く存在としての孔雀明王は密教において重要視された
- 8) 玄奘三蔵がインドから持ち帰った仏典を漢訳し、弟子が開いた宗派。日本には遣唐使により伝わったとされる

参考文献

- 大蔵経テキストデータベース研究会「SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース 2012版」
門川徹真「酔象調伏説話の変遷」印度学仏教学研究／日本印度学仏教学会（編）駒沢大学第16回学術大会紀要 1965年
清水康二「将棋伝来再考」考古學論攷 檀原考古学研究所紀要第36冊 2013年
平川彰『仏陀の生涯 仏所行讃を読む』春秋社 1998年
梅林勲・岡野伸『世界の将棋』将棋天国社 2000年
木村義徳『持ち駒使用の謎 日本将棋の起源』日本将棋連盟 2001年
原実（訳）『大乘仏典13 ブッダ・チャリタ（仏陀の生涯）』中公文庫 2004年
岡野伸『東洋の将棋』大阪商業大学アミューズメント産業研究所叢書第8巻 2007年